

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

今回の訪問先は、和歌山県立近代美術館です。

万博のレガシー —解体と再生、未完の営為を考える—

URL：[万博のレガシー —解体と再生、未完の営為を考える— | 和歌山県立近代美術館](https://www.wakayama-museum.jp/exhibition/2026/214-56/)

和歌山県立近代美術館は、黒川紀章氏がその設計を手掛けたものです。

この「万博のレガシー展」は、創造と解体を繰り返す万博の特異な祝祭空間について 2 部構成で振り返るものとなっています。



第 1 部【万博と日本 グローバリズムの光と影】では、株式会社乃村工藝社の博覧会コレクションを中心に、日本との関わりに重点を置き、19 世紀の初期万博から 1970 年（昭和 45 年）大阪万博開催までの歴史と会場空間の変遷をたどっています。

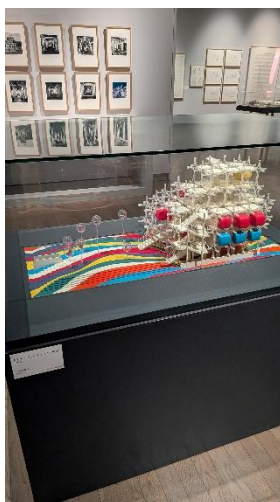
殖産興業を国策として進めた明治期における内国勸業博覧会を発展させる形で、アジア初の万博開催に向けた取組が紹介されています。その中でも、昭和 15 年（1940 年）の開催に向け、東西文化の融合をテーマに国際博覧会事務局との調整まで進んでいながら実現を見なかった「紀元二千六百年記念日本万国博覧会」について、作成されていたポスターや会場のレイアウト図まで展示されていたのは、日本の万博といえば 1970 年大阪万博の印象が強かったため、驚きをもって受け止めました。



第2部【メタボリズムと共生 黒川紀章の EXPO'70 を中心に】では「人類の進歩と調和」を統一テーマに掲げた1970年大阪万博において「メタボリズム（新陳代謝）」という建築理念をキーワードに複数のパヴィリオン設計に関わった黒川紀章氏の仕事を、2025年の大阪万博の統一テーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」にも連なるその先見性と合わせて紹介しています。

黒川氏は、「メタボリズム」には「増殖」「交換」「分裂」、そして「破壊」という4つのプロセスがあると述べています。そして、この「破壊」というプロセスについて、今日という言葉で言えば「リサイクル」、すなわち「循環」を意味するものであると後年のインタビューで説明しています。実際、万博のパヴィリオンも、必ず解体されるものとして、別の場所で再生・再利用することができるように設計されていました。今回の企画展では、大阪万博の「空中テーマ館」、「タカラ・ビューティリオン」、「東芝 IHI 館」のほか、1972年に東京・銀座に建てられた「中銀カプセルタワービル」など黒川氏の代表的な建築物が紹介され、更には、「東芝 IHI 館」解体時の写真も展示されており、この、建設と同時に「美しく壊す」ことが想定されている建築思想は、持続可能性を強く求められる今日において、意識されるべき思想であると感じました。

第2部の最後には、2025年の大阪・関西万博にて和歌山ゾーンに出品されたアートワーク《トーテム》も特別展示されています。





職員の方にもお話をお伺いしました。

近年の万博では、参加者にも現代社会がはらむ数多の課題について考える姿勢が求められています。今回の「万博のレガシー展」では、2025年大阪万博の統一テーマにも連なる思想を持ってパヴィリオンを設計した黒川氏の仕事を紹介することで、万博に託された理念や付随する今日的課題にも触れ、万博のレガシー（遺産）について来場者の皆様とともに再考する機会としたい、とのことです。

記念講演会では、建築家の隈研吾氏から、黒川氏の「メタボリズム」を今日的なものとする「ネオメタボリズム」宣言もなされたとのことで、昭和に開催された万博から連なるレガシーの令和における意義を再認識する機会になることを願っています。

万博のレガシー —解体と再生、未完の営為を考える—の会期は5月6日まで。

会期：令和8年2月14日（土）～令和8年5月6日（水）

主催：和歌山県立近代美術館

住所：和歌山県和歌山市吹上1-4-14